



大衆文化研究プロジェクトニュースレター

No.03 2019



◀ 写真 教科書の試作版『動態としての「日本」大衆文化史：キャラクターと世界』

ごあいさつ

昨年度の大衆文化研究プロジェクトでは、各班の研究者が集い2つの大きな活動に取り組みました。まず、大衆文化研究プロジェクト総合国際シンポジウムを「メディアミックスする大衆文化」と題して開催し、プロジェクト3年目の総括と今後の研究叢書作成などにつながる課題について議論しました。さらに、アカデミック・プログラム及び教育プログラムを兼ねた「大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座IN北京」を、清華大学、国際交流基金、北京外国語大学、北京師範大学と共催により実施しました。

また各班においても、共同学術シンポジウム「妖怪：もう一つの日本の文化コード」(漢陽大学)、「MANGA labo 6」(カナダ・コンコルディア大学)など海外での活動や、人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」に連動するかたちで、「日文研コレクション 描かれた「わらい」と「こわい」展 — 春画・妖怪画の世界 —」(京都市・細見美術館、京都新聞と共催)、「日文研の妖怪パネルで遊ぼう!」及び「想像×創造する帝国・吉田初三郎鳥瞰図へのいざない」(大阪市中央図書館と連携)、「おいしい広告2:ヨーロッパと日本の酒・煙草・菓子のポスター」(京都工芸繊維大学美術工芸資料館と共催)の各展を実施し、いずれも好評のうちに終了しました。これらの活動の成果を糧にし、各班の横断を進めながら、研究叢書の刊行など、さらに充実した成果に結びつくよう、引き続き各種活動に取り組んでいます。

目次

ごあいさつ

活動報告

総括班+教科書プロジェクト 前川志織

古代・中世班 吳座勇一

近世班 木場貴俊

近代班 前川志織

現代班 アルバロ

研究紹介① 吳座勇一

研究紹介② アルバロ

お知らせ

活動報告(総括班+教科書制作プロジェクト)

前川 志織
日教研 特任助教

2018年度における総括班の主な3つの活動をご紹介します。

1. 大衆文化研究プロジェクト総合国際シンポジウム 「メディアミックスする大衆文化」 (第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会 分科会として10/27-28に開催)



2018年10月27日(土)
9:30~15:05
10月28日(日)
9:30~12:45

京都リサーチパーク サイエンスホール
〒600-8813 京都府下京区宇治寺南町134
(〒600-8813 京都府下京区宇治寺南町134)

参加費8,000円(参加費無料は要申込)
※本学が主催する国際学術大会の共同プログラムにも参加できます。
【お問い合わせ先】
国際日本文化研究センター プロジェクト推進室
TEL) 075-335-2079
E-mail) taishu_staff@nichibun.ac.jp
【主催】
国際日本文化研究センター大衆文化研究プロジェクト

【主催者】
日教研
国際日本文化研究センター
【基調講演】
小松和彦(国際日本文化研究センター・所長)
【研究発表】
アラー・キンブロー(コロンビア大学・教授/国際日本文化研究センター・外国人研究員)
木場貴俊(国際日本文化研究センター・プロジェクト研究員)
横山泰子(法政大学・教授)
伊藤慎吾(伊藤大学・非常勤講師/国際日本文化研究センター・非常勤講師)
金子智太郎(東京芸術大学・非常勤講師)
近藤和都(近藤和都特別研究員)
秦剛(北京外国語大学北京日本学研究中心・教授)
ディック・ステゲウェル(オーストラリア大学・教授)
【総合討議】
伊藤慎吾(国際日本文化研究センター・非常勤講師)
近藤和都(近藤和都特別研究員)
金子智太郎(東京芸術大学・非常勤講師)
横山泰子(法政大学・教授)
アラー・キンブロー(コロンビア大学・教授/国際日本文化研究センター・外国人研究員)

まず日教研・小松和彦所長による基調講演「大衆文化研究をめぐる諸課題」があり、その後、日教研・ケラー・キンブロー外国人研究員、日教研・木場貴俊プロジェクト研究員、法政大学・横山泰子教授、日教研・伊藤慎吾客員准教授、東京藝術大学・金子智太郎非常勤講師、日本学術振興会・近藤和都特別研究員、北京外国語大学北京日本学研究中心・秦剛教授、オーストラリア大学・ディック・ステゲウェル准教授が、研究成果の発表を行いました。最後に、日教研・大塚英志教授を総合司会として、各研究班からの討論者が登壇して2日間に渡る発表を総括し、フロアを交えての総合討論を行いました。

以上の2日間のシンポジウムでは、会場からさまざまな意見が寄せられ、活発な議論が行われました。総合討議の司会からは、この2日間の発表に共通する論点として、大衆文化を「動態」としてとらえること、受容者が同時に作り手でもあること、文化を生成していく「集合知」への注目、動員のツールのメディアミックスへの注目などが提示された。会場からは、メディアを超える文化現象について、その魅力の勘所を捉えることが肝要ではないか、学問における共同性の重要性、階層を超えた「普通」の読者や同じ活字媒体でも各ジャンルでの表現の違いに配慮することの重要性、といった意見が寄せられました。これらの議論を通して、プロジェクト3年目の総括と今後の研究叢書作成などにつながる課題を具体的に見いだすことができた貴重な機会となりました。

このシンポジウムでは、広く東アジアの研究者が参加し、各研究班より2名の発表者、1名の総合討議報告者に登壇することで、通時的・国際的な視点や各研究班との連携を意識しながら、日本大衆文化研究を通じての「新しい日本像」の提言について議論することを目的としました。大衆文化は、時代を超え、国境を超え流動的に変化し、多様な媒体が活用されるといった特徴を見いだすことができます。このシンポジウムを通して、本プロジェクトの目標を、各研究班を横断しながら具体的に検討することで、プロジェクト開始3年目に当たる中間共通観点の総括と課題を見出すことを目的としました。



会場の様子

2. 「大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座 IN北京」(9/25-28に開催)



大塚英志「戦時下東宝映画文化工作と戦後日本サブカルチャーの発生」

小松和彦「幕末の江戸の大衆文化を覗く」

荒木浩「投企する古典性—ブツダ・『源氏物語』・聖徳太子から考える—」

劉建輝「制度の歴史から感情の歴史へ—画像資料でたどる日本人の「満洲」幻想」

安井眞奈美「出産の習俗と怪異伝承—うぶめの絵を手がかりに」



ワークショップ後の記念撮影

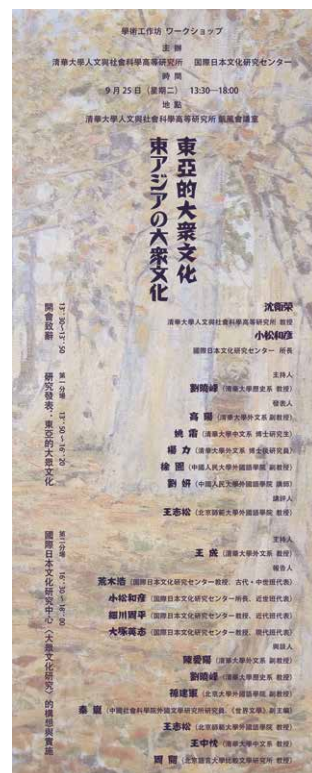
この国際ワークショップ及び連続講座は、日文研と、清華大学、国際交流基金、北京外国語大学、北京師範大学が主催・共催し、アカデミック・プログラム及び教育プログラムを兼ねたものとして、大衆文化研究プロジェクトがひとつの目標として掲げる教育パッケージの提供に関して、国際的な視点を得ることを目的として実施されたものです。4日間を通して241名の研究者及び大学院生が参加しました。

1日目の清華大学で開催された国際ワークショップ「東アジアの大衆文化」では、清華大学人文社会学高等研究所・沈衛荣教授と日文研・小松和彦所長による開会の辞のあと、第一部では、清華大学歴史系・劉曉峰教授の司会のもと、中国の研究者による5つの発表が、第二部では、日文研の大衆文化研究プロジェクトの構想と実施についての各研究班の代表から報告が行われ、アットホームな雰囲気の中、清華大学などの学生も多く参加し、充実したワークショップとなりました。

2日目から4日目の連続講座は、清華大学、北京外国語大学、北京師範大学で開催され、日文研の小松和彦所長、荒木浩教授、劉建輝教授、細川周平教授、大塚英志教授、安井眞奈美教授がそれぞれ講義を行いました。連日、講義室は、若い学生たちでほぼ満席となり、各講義のあとには、学生からの活発な質問が寄せられました。

連続講座のプログラムは次の通りです。

細川周平「近代日本音楽史の輪郭」



◀ 9月25日ワークショップチラシ

主 辦
清華大學人文與社會科學高等研究所
國際日本文化研究中心

承 辦
清華大學東亞語言與文化研究學科群

地 點
清華大學 文南樓116會議室

時 間
2018年9月26日(周三) 9:50-12:30

日本研究

大衆文化研究

系列講座 in 北京 (一)

主持人 **王 成**
清華大學外文系教授 東亞語言與文化研究學科群帶讀者
陳愛陽
清華大學外文系副教授

主 講 人 **細川周平**
國際日本文化研究中心教授 研究方向: 音樂學、日裔巴西人歷史

講座要旨 **近代日本音樂史の輪廓**
1853年美國軍艦(馬尼拉)の到来、對音樂領域來說、與其他領域一樣是劃時代的事件。日本方面得知、強大的軍力是通過特別的樂音的命令系統而發揮機能的、因而對其展開積極的學習、進而知曉音樂文化與科學、哲學、政治、經濟等等互相聯動、形成了一種可以稱之為「世界音樂體系」的結構。本次講座概述日本對這種音樂體系的接受過程、從而考察音樂文化的近代化問題。

主 講 人 **大塚英志**
國際日本文化研究中心教授 研究方向: 漫畫表現史、漫畫創作論、近代文學史

講座要旨 **戦時東洋電影文化工作與戦後日本亞文化的發生**
戦後亞文化の黎明期の開創者之中、很多人曾經參與過無產階級藝術運動、並在戰時有著參與文化工作、宣傳工作的經歷。他們將戰時文化工作的方法論、媒介理論帶到了戰後、從而形成了戰後日本的亞文化。本次演講將通過介紹近日初次公開的、牧野守所藏的紀錄了真實文化工作的一手資料《市川鎮二文書》、來考察這段歷史、指出戰後日本大衆文化與戰時的連續性。

▲ 9月26日シリーズ講座チラシ

主 辦: 國際日本文化研究中心
日本國際交流基金

承 辦: 北京外國語大學日本學研究中心
教育部國別和區域研究基地日本研究中心

日本大衆文化研究シリーズ講座

2

主 講: 荒木浩 (主持: 張龍妹)
國際日本文化研究中心副所長 研究方向: 日本文學
投企する古典性・ブツダ・『源氏物語』・聖德太子から考える

主 講: 小松和彦 (主持: 郭連友)
國際日本文化研究中心所長 研究方向: 民俗學、文化人類學
幕末の江戸の大衆文化を覗く

Time: 9月27日 14:00-17:15

北京日本學研究中心三層多功能廳

扫码報名



▲ 9月27日シリーズ講座チラシ

日本大衆文化研究

系列講座 in 北京 (二)

從制度的歷史到情感的歷史
——通過影像資料看日本人的「滿洲」幻想

劉建輝
(國際日本文化研究中心副所長、教授、研究領域為中日文化交流史)

日俄戰爭之後、日本人大量移民中國東北地區、至二戰結束時多達150萬人。本講座通過日俄戰爭以來刊行的各種地圖、導遊圖以及明信片等影像資料、探究這些影像如何塑造「滿洲」幻想、以探求引誘多日本人赴滿通商「新大陸」的問題。並嘗試採用影像資料研究歷史的有效性、以期糾正長期偏重於政策和制度分析的歷史研究方法。

分鏡的習俗與妖怪傳說
——從姑獲鳥畫說起

安井真奈美
(國際日本文化研究中心教授、研究領域為日本文學、文化人類學)

18世紀的日本、隨著各種妖怪畫的流行、描繪妖怪中或分鏡時繪的女性妖怪為動植物開始出現。本講座以妖怪畫為素材、結合相關習俗和傳說、解讀在生計困難的時代人們是以怎樣的智慧和方法來繁衍生息的。同時還將考察從近代到現代、隨著分鏡形態的演變、分鏡的習俗以及人們的主命意識所發生的變化。

主持人: 王志松(北京師範大學教授)
點評人: 劉曉峰(清華大學教授)

地 點: 北京師範大學 後主樓914會議室
時 間: 2018年9月28日 14:00~17:30

主 辦: 國際日本文化研究中心 北京師範大學日文系

◀ 9月28日シリーズ講座チラシ

3. 教科書制作プロジェクトによる教科書の試作版『動態としての「日本」大衆文化史:キャラクターと世界』(2018年10月20日、第二版2019年1月25日、国際日本文化研究センタープロジェクト推進室)の刊行

この試作版は、固有の作者・著名な作品でなく、広く、共有され、表現形式を変えて、繰り返し表現されたキャラクターと世界を選び出し扱い、共有した無数の作り手、受け手の存在を浮かび上がらせ、「大衆にとってキャラクターと世界は何か」という視点から「日本大衆文化史」を描くことを目的としました。この試作版を使用した模擬授業を北京外國語大學で行い、教科書制作プロジェクトメンバーより6名を講師として派遣しました。



模擬授業の様子

活動報告:古代・中世班

古代・中世班 H30年度共同研究会

④シンポジウム「投企する太平記—歴史・物語・思想」レポート

呉座 勇一

日文研 助教

研究代表者:荒木 浩 日文研 教授

開催日時:平成30年11月17日(土)・18日(日)

開催場所:国際日本文化研究センター第1共同研究室

大衆文化プロジェクト古代・中世班の共同研究「投企する古典性—視覚／大衆／現代」の第4回(特別会議)として、「投企する太平記—歴史・物語・思想」と題したシンポジウムを開催した。

まず本シンポジウムの企画理由を説明する。『太平記』は40年に及ぶ南北朝戦乱を40巻かけて描いた大長編の軍記物語で、『平家物語』と並ぶ中世文学の代表的作品である。南北朝史全体を叙述した最古の作品であるため、水戸藩が『大日本史』を編纂した際にも同作に大きく依拠した。しかし明治時代の歴史家である久米邦武の「太平記は史学に益なし」という発言に象徴されるように、近代歴史学は『太平記』などの軍記類の史料的価値を疑問視し、歴史研究の材料としてなるべく使わないよう戒めた。この結果、現在でも中世史学は『太平記』にあまり関心を払わず、国文学における『太平記』研究の動向を十分に把握していない。一方、国文学の側も急速に進展する南北朝史研究(特に政治史)の成果を必ずしも吸収できていないように感じられる。そこで『太平記』をめぐる歴史学と国文学が対話するきっかけを作るべく、「投企」をキーワードに本シンポジウムを企画した。

『太平記』は先行する国内外の作品をいかに咀嚼して生成したのか。『太平記』の物語構造や世界観、歴史認識、知識体系などが、近世・近代・現代の文芸作品や歴史叙述、思想などにいかに影響を与えたのか。さらには『太平記』が注釈本やパロディ作品も含めてどのように享受されていったのか。このような『太平記』世界の歴史的展開に焦点を合わせて、歴史学研究、文学研究、思想史研究を横断する5人のゲストスピーカーを招いてシンポジウムを行った。

シンポジウム1日目の冒頭、呉座勇一(日文研)がシンポジウムの趣旨を説明した。『太平記』が中世において「大衆文化」だったと言い得るかについては、議論が分かれるところである。しかし『太平記』は近世においては慶長7年(1602)の古活字版以来、多数の刊本が出版されたベストセラーであり、原典のみならず『参考太平記』(1689)などの注釈書や「太平記読み」といった講釈、浄瑠璃・歌舞伎などの「太平記物」を通して人々に浸透した。『太平記』は江戸文学、近世文学としての顔を持ち、出版文化の隆盛を背景に『太平記』の物語世界が多様なメディアで展開したのである。

また江戸時代には『後太平記』(1677)、『続太平記』(1686)、『陰徳太平記』(1695)、『朝鮮太平記』(1705)、『慶安太平記』(1870)など、「太平記」を冠した作品(軍書・実録・歌舞伎など)が次々と登場した。さらに『仮名手本忠臣蔵』(浄瑠璃1748初演)に代表されるように、『太平記』の人間関係や設定を借りた作品も数多く作られ、仮名草子『魚太平記』『草木太平記』などのパロディ作品(異類合戦物)も出現した。『太平記』の物語構造や世界観は、大衆文化の1つの型になり、現代にまで影響を与えている。こうした文化事象を総体として捉えた場合、『太平記』は大衆文芸の源流と言え、大衆文化プロジェクトの研究対象として極めて重要であると考えられる。

初日1本目の報告、和田琢磨(早稲田大学)の「『太平記』と武家—南北朝・室町時代を中心に—」は、近年国文学で急速に進展している『太平記』諸本論の成果と課題を総括したものである。従来の研究では、『太平記』諸本における合戦場面の叙述の揺れ(本文異同)については、諸大名が自身・先祖の戦功を『太平記』に書き入れるよう個々に要求したため、と解釈されてきた。この考えは、『太平記』を「室町幕府監修あるいは公認の歴史書、いわば南北朝の動乱に関する正史」と捉える通説と密接に結びついてきた。しかし上記の説の史料的根拠は、『太平記』に先祖の武功が記されていないので書き足して欲しいと嘆く今川了俊の『難太平記』(1402)しか存在しない、と和田は指摘する。和田は『太平記』諸本の中で最も特異な伝本である天正本や現存最古の伝本である永和本の再検討を通じて、功名書き入れ要求—『太平記』正史説に疑問を呈し、『太平記』の生成過程・異本派生の過程を再考すべきと主張した。質疑では、常に本文が流動する中世軍記と、出版によってテキストが固定される近世軍記との違いについての議論などが行われた。

2本目の報告、谷口雄太(立教大学兼任講師)の「『太平記』史観」をとらえる」は、『太平記』が提供した歴史認識の枠組みが現代に至るまで南北朝史研究を規定してきたことを論じた。谷口がこれまで進めてきた足利氏研究を題材に、足利尊氏と新田義貞が武家の棟梁の座をめぐる争ったという『太平記』の構図が、新田氏を足利氏と並ぶ源氏嫡流と捉える歴史認識を生み出し、新田氏は足利一門であるという歴史的事実の発見を妨げてきたと説く。その上で、『太平記』の史料としての活用



会場の様子

法を自覚的に追究せず、結果的に『太平記』の歴史観に絡め取られてきた中世史学界の問題を鋭く批判した。質疑では、仏教思想・無常観というひとつの思想・構想で貫かれた『平家物語』と異なり『太平記』には一貫した歴史観が見出せないにもかかわらず、「太平記史観」という概念を設定することは適切かとの意見が提出され、白熱した討論が行われた。

3本目の報告、井上泰至(防衛大学校)の「『太平記』の近世的派生／転生—後醍醐・楠像を軸に—」は、『太平記』原典で描かれた後醍醐天皇と楠木正成の関係、両者の人物像が近世を通じてどのように変容していったかを、軍書・和歌・漢詩文などの分析を通じて明らかにした。徳川光圀が湊川に建立した楠木正成の墓碑(1692、賛文は明朝の遺臣である朱舜水が起草)や、楠木一族に焦点を当てた近世軍書『南朝太平記』(1709)は、不徳の君である後醍醐に対し死をもって諫める中国の士大夫的な正成像を描いた。だが国学や後期水戸学においては、主君のためなら命を投げ出すことも厭わない正成の誠忠が強調されるようになり、幕末の尊皇攘夷運動の過激化、さらには戦時中の玉砕・特攻へとつながっていくと論じた。また『太平記』から派生した近世の通俗史書では、後醍醐周辺の「君側の奸」の専横を強調することで(結果的に)後醍醐の不徳性を緩和する傾向が見られると指摘した。質疑では、オブザーバーの兵藤裕己が、藤田幽谷が『太平記』原典の後醍醐批判を封印したことに言及し、後期水戸学が天皇を名分論の対象から外して一切の批判を禁じたことが近代天皇制に暗い影を落とすと述べた。

4本目の報告、伊藤慎吾(日文研客員准教授)の「妖怪資料としての『太平記』受容—「広有射怪鳥事」を中心に—」は、『太平記』に登場する妖怪記事が後世の大衆文化に与えた影響を考察したものである。『太平記』巻十二の「広有射怪鳥事」に登場する「いつまで、いつまで」と鳴く怪鳥は、江戸時代の浮世絵師である鳥山石

燕の妖怪画集『今昔画図続百鬼』(1779)で「以津真天(いつまで)」と命名された。さらに佐藤有文『日本妖怪図鑑』(1972)では、餓死者の死体を食いあさり「いつまで死人をほうっておくのだ!」と遺族を責めるという性格が付与され、現代の妖怪ブームの中でマンガ・アニメ・ライトノベル・ゲームなどに頻出するようになった。一方で、もともとの出典である『太平記』との関連性は失われつつあることに触れ、作り手と受け手の集合知という基盤に立脚しない点で現代的な大衆文化の潮流に乗っていると説く。質疑では、餓死者の死体を食うという設定を最初に導入したのは水木しげるであるとの指摘があった。また、『太平記』では建武政権の崩壊を予言する役割を担った怪鳥が、どうして現代では餓死者と関連づけられるようになったかという質問が出され、活発な議論が交わされた。

シンポジウム2日目には亀田俊和(台湾大学)が「『太平記』に見る中国故事の引用」という報告を行った。『太平記』の特色として、中国故事の大量の引用が挙げられる。国文学では古くから注目され、研究が積み重ねられてきた。しかし、出典はどの作品かという点に関心が集中し、引用の意図などの考察は少ないと亀田は批判する。亀田報告は『太平記』において本筋の話の遮ってまで延々と中国故事を紹介する長文記事を「大規模引用」と名付け、その分布傾向や引用方針の変化を分析した。そして大規模引用、特に政道批判型の大規模引用が巻を追うごとに増加する傾向があると指摘した。さらに大規模引用が観応の擾乱を叙述する巻でピークに達して、日本の南北朝史との対応関係も複雑でひねったものになることに着目し、一見無関係に見える故事を引用するという“道草”によって読者の興味関心を引くという逆説的な演出があったのではないかと論じた。質疑では、中世の日本人がどのようにして漢籍を学んだかという問題も視野に入れる必要があり、幼学書の研究も参照すべきではないかとの意見が提出された。他にも、混沌とした『太平記』の叙述に対して予定調和を排したも

のとして積極的・肯定的な評価を与えることはできないかなど、興味深い意見が寄せられた。

続いて、小秋元段(法政大学)が5本の報告に対してコメントを寄せ、本シンポジウムの柱は「太平記史観」からの超克と、『太平記』の大衆化の2点であったと総括した。前者に関しては、『太平記』が複雑難解な南北朝史を整序して語るために、新田・足利互角の構図などの虚像を創出したのは確かだが、それが同時代において説得力をもって受け入れられたことの意味は小さくないと指摘し、歴史学の側からもこの問題に積極的に取り組んで欲しいと発言した。後者に関しては、『太平記』は原典にせよ、江戸時代の太平記講釈の種本である『太平記評判秘伝理尽鈔』にせよ、全巻を通読した人は少なく、常に「部分」が切り取られて享受されてきたと指摘

し、作り手の意図とは別に受け手による多様な解釈・読み替えによって『太平記』世界が展開したことに留意する必要があると述べた。

最後に、5本の報告とコメントを踏まえて、総合討議が行われた。『太平記』抜きで南北朝時代史を叙述することは可能か、『太平記』的な歴史叙述と異なる通史叙述はあり得るのか、古典文学を骨董品にせず若い世代に魅力を伝えていくにはどうしたら良いかなど、狭義の『太平記』研究に留まらない、大衆文化プロジェクトを進めていく上で示唆に富む今日的な課題が多く提起され、極めて有意義な2日間だった。

活動報告:近世班

近世班 中日妖怪学術研究シンポジウム(中日妖怪学研究専門研討会)

木場 貴俊
日文研 プロジェクト研究員

主催:中国民俗学会、精華大学歴史系、北京民俗研究院、
国際日本文化研究センター
日時:2019年3月23日(土)8:40~18:00
場所:北京東嶽廟(東岳廟)



会場の様子

中国民俗学会の事務局がある、北京東嶽廟において日本と中国の妖怪に関する初めての学術シンポジウムが開催された。

シンポジウムは、葉濤(中国社会科学院宗教研究所研究員・中国民俗学会会長)による開幕の挨拶、劉曉峰(精華大学歴史系教授)による趣旨説明のあと、研究報告が行われた。

劉教授は、中国において「妖怪」研究は進んでいない

現状を踏まえ、最先端の「妖怪」研究を蓄積している日本の研究報告を聞き意見交換することで、今後の中国での「妖怪」研究の発展の一助とするため今回のシンポジウムを企画したと説明した。

第1部は、日本の研究者による報告で、最初に小松和彦(日文研所長)「日本妖怪文化再考」が代読された。

続けて、人文地理の観点から妖怪の出没する場所、何処からやってくるのかに関する佐々木高弘(京都先端



科学大学教授)「日本における怪異・妖怪の循環ネットワーク」、日本における怪異の歴史の変遷を辿った木場貴俊(日文研プロジェクト研究員)「日本近世の怪異認識をめぐって」、目の妖怪を事例にして、身体の視点から妖怪をどう解釈可能なのかを提示した安井真奈美(日文研教授)「妖怪と身体一目と瞳に注目して」、世界各国で行っている水難防止教育の普及と各地での水にまつわる怪異伝承の関係に関する永原順子(大阪大学助教)「怪異伝承と水難事故との関わり～日本およびASEAN諸国での調査をもとに～」があった。

第2部は、中国の研究者による報告が行われた。劉宗迪(北京語言大学教授)「鳥獸有靈—『山經』中的靈怪」は、中国の「妖怪」について『山海經』から考察したもので、『山海經』では動物であったこと、その出現が災害の前兆とされていたことなどを指摘した。陳連山(北京大学中文系教授)「從『山海經』中的妖怪、祥瑞談妖怪学研究」は、『山海經』研究史と日本の「妖怪」研究史を照らし合わせながら、これからの中国の「妖怪」研究の展望を示した。葉濤「泰山治鬼說」流變舉要」は、泰山が人に害をなす「妖魔鬼怪」を退治する話に関して、仏教の影響や石敢当など民間信仰といった観点から検討した。黄景春(上海大学中文系教授)「從五通仙人到五路財神—五通神的神格轉變研究」は、仏典に見られる五通仙人の歴史的な変遷を追うことで、中国では「妖怪」や現世利益的な神格に変わっていったことを指摘した。畢雪飛(浙江農林大学外国語学院教授)「異界之「界」何在?—中日異界想象比較研究」は、「異界」という分析概念が日本のものであることを前置きにして、中国で「異界」的なものについて、今後どのように考えるべきかを具体的な事例をあげながら検討を行った。

その後、フロアを含めた全体討論が行われた。そこでは、日本の研究に比して中国ではまだ図像を用いた研究は未発達であるなどの意見が出た。最後は、今回の学術シンポジウムが中国の「妖怪」研究の大いなる一歩となったこと、今後も各国の「妖怪」研究を促進させていくために協力しようという劉教授の総括で閉幕した。

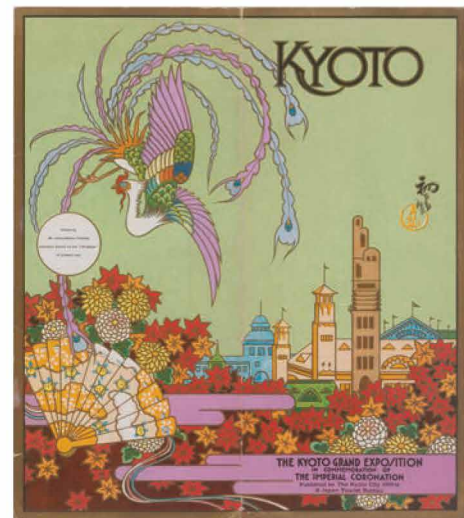


会場の様子

活動報告:近代班

① 「想像×創造する帝国・吉田初三郎鳥瞰図へのいざない」

前川 志織
日教研 特任助教



近代班では、2018年度に4種の展覧会事業に取り組みました。そのうち2つをご紹介します。

2018年11月2日から14日まで大阪市立中央図書館にて「想像×創造する帝国・吉田初三郎鳥瞰図へのいざない」を開催しました(日教研 教授・劉建輝、助教・石川肇、助教・古川綾子による展示企画・運営)。大阪市立図書館の全面的協力を得て13日間で8,710名の方に来場いただきました(一日平均670名)。この展覧会は、国際共同研究「画像資料(絵葉書・地図・旅行案内・絵葉書・写真等)による帝国域内文化の再検討」等で研究対象としてきた、収集中のコレクションである近代日本の旧植民地関連画像資料から、絵師・吉田初三郎による国内外の鳥瞰図を中心に旅行案内(ガイドブック)や絵葉書等171点を紹介したものです。

全四部構成により、劉建輝教授と石川肇助教による各資料のキャプション(展示説明パネル)を添えることで、「帝国」という概念がどのように発展したのか、などをていねいに説明することを心がけるとともに、近代日本の旧植民地関連画像資料の大衆文化的特性を意識し、従来とは異なる視点や研究資源を提示することを目指しました。またこの展示に合わせて、劉建輝教授による記念講演会が会場の大阪市立中央図書館の共催事業として実施されました(講演会「大阪からアジアへ 歴史を鳥瞰する」参加者153名)。

② 「おいしい広告2:ヨーロッパと日本の酒・煙草・菓子のポスター」

おいしい広告2
ヨーロッパと日本の酒・煙草・菓子のポスター

2018年12月17日(月)～2019年2月23日(土)
京都工芸繊維大学美術工芸資料館 2階 展示室1-3

開催時間：10:00～17:00(入館は16:30まで)
休館日：日曜・祝日、12月29日(土)～2019年1月9日(土)、1月19日(土)
入館料：一般200円/大学生150円/高校生以下無料
*京都・大学ミュージアム連携所属大学の学生・院生は学生証の提示により無料で入場できます。
主催：京都工芸繊維大学美術工芸資料館/国際日本文化研究センター・機関拠点型基幹研究プロジェクト「大衆文化の過渡的・国際的研究による新しい日本像の創出」

京都工芸繊維大学 美術工芸資料館 MUSEUM AND ARCHIVES
京都・大学ミュージアム連携 University Museum Association of Kyoto
E-X 研 人間文化研究機構 「博物館・展示を活用した 最先端研究の可視化・高度化事業」

また、2018年12月17日から2019年2月23日まで、京都工芸繊維大学美術工芸資料館との共催により、展覧会「おいしい広告2:ヨーロッパと日本の酒・煙草・菓子のポスター」を開催しました(日文研 特任助教・前川志織による展示企画・運営)。会期中は1,528名(学外:1,308名 学内:220名)の方に来場いただきました。この展覧会では、私たちの日々の暮らしのなかで、味覚や嗅覚に快感を与え楽しめる嗜好品である酒、煙草、菓子の広告に焦点をあて、優れたポスター・コレクションで知られる京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のポスターを中心に、国際日本文化研究センター所蔵資料などを交えた70点あまりの広告資料を紹介しました。これらの広告を通して、ヨーロッパと日本の嗜好品文化や視覚的表現の工夫を見比べつつ、近現代における嗜好品商品と大衆的な視覚的イメージとの関係を探る試みとなりました。1月12日には同時開催の「南方熊楠-人、情報、自然-」展と「近代日本のステンドグラス-木内真太郎資料を中心に」展と合同で、ギャラリートークを実施しました(参加者19名)。トータル1時間を超える白熱のトークとなりましたが、皆さん熱心に聞いてくださったことが印象的でした。



ギャラリー・トークの様子

活動報告:現代班

現代班 H30年度第3回目の共同研究会 「運動としての大衆文化」レポート

アルバロ・エルナンデス
日文研 プロジェクト研究員

発表者:大塚 英志 日文研 教授
開催日時:平成30年2月33日(土)・24日(日)
開催場所:国際日本文化研究センター第5共同研究室

平成30年度大衆文化プロジェクト現代班の「運動としての大衆文化」共同研究会の第3回は10名の報告で構成されており、一次的な資料調査に基づいたメディア研究や民俗学に焦点を合わせて報告が多かった。

プログラム

嵯峨景子(明治学院大学)「戦時下の少女雑誌—『少女倶楽部』『少女の友』『少女画報』を中心に」、雑賀忠宏(京都精華大学国際マンガ研究センター)「悪書追放運動」再訪:マンガの規範性をめぐる大衆文化運動として」、佐野明子(桃山学院大学国際教養学部)「戦中・戦後におけるディズニーの受容と展開:渡辺泰コレクションを手がかりに」、前川志織(日文研)「戦間期日本の新聞広告にみる洋菓子の意味の変遷と「大衆」としての子ども像」、金日林(日文研)「オタク文化と公共性」、菊池暁(京都大学人文科学研究所)「私の民俗学運動史研究」、姜文姫(同志社大学・博士課程)「北海道における炭鉱の文化運動—太平洋炭鉱の主婦会と『母のうぶごえ』を中心に」、内田力(東京大学東洋文化研究所)「運動としての「歴史修正主義」:『国史大辞典』元号方針変更事件と網野善彦を中心に」、松井広志(愛知淑徳大学創造表現学部)、「メールゲーム/ネットゲームのコミュニケーションと文化—ゲームの地域史、多元的なゲーム研究に向けて—」。

その二つのテーマを取り扱ったいくつかの報告の要旨は以下の通りである。

戦時下の少女雑誌 —『少女倶楽部』『少女の友』『少女画報』を中心に

嵯峨 景子 (明治学院大学)

本報告では近代の少女雑誌を対象に、戦時下の動向がどのように誌面に影響を与えていたのか、満州事変と日中戦争という二つの期間を中心に検討する。

この時期の主たる少女雑誌の布陣は、最大発行部数の講談社の『少女倶楽部』、抒情画家の中原淳一を中心に都市中間層の女学生を対象にした実業之日本社の『少女の友』、歌劇と映画を中心に「軟派」なコンテンツも掲載する『少女画報』(東京社→新泉社)という状況であった。近代の少年少女雑誌と戦時下は、内務省による統制が進められた1938年以降を中心に検討が行われている。本報告ではこの3誌を対象に、満州事変以降の社会動向がどのように誌面に反映されていたのか、その様相を明らかにしていく。



戦中・戦後におけるディズニーの受容と展開:渡辺泰コレクションを手がかりに

佐野 明子 (桃山学院大学国際教養学部)

戦中・戦後にかけて日本のアニメーションやまんが、絵本、キャラクターグッズ等に多大な影響を与えたウォルト・ディズニー・プロダクション作品の受容および展開について考察する。そのさい、日本のアニメーション研究の第一人者・渡辺泰のコレクションから、『Disney Journal』(大映が設立したディズニーのファンクラブ「ディズニークラブ」の機関誌)など第二次テキストも用いる。本発表は、近年のアニメーション受容研究が「オタク研究」に限定される傾向を鑑みて、より広いオーディエンス研究へ接続することを目指す。

戦間期日本の新聞広告にみる洋菓子の意味の変遷と「大衆」としての子ども像

前川 志織 (日文研)

洋菓子の新聞広告をたどると、その文案と図案から、この商品が子どもとの結びつきを強めていったさまを辿ることができる。たとえば、洋菓子の大衆化に大きな役割を果たした菓子製造・販売会社の一つ・森永製菓株式会社(1889年設立)のミルクキャラメル新聞広告には、童画風のイラストレーションを用いた広告を見つけることができる。本発表では、1913年から40年までの



森永ミルクキャラメルの新聞広告、なかでも1920年代より散見される童画風広告をてがかりに、洋菓子広告と結びつけた「大衆」としての子ども像—ターゲットとしての子ども/視覚的イメージとしての子ども像/大人にとっての子ども観—について、商品の文化的・社会的意味を形成する役割をもつ広告の視覚的特性に注目し考察する。

民俗学に焦点を合わせた報告に関して、菊池暁(京都大学人文科学研究所)と姜文姫(同志社大学・博士課程)の報告要旨を取り上げよう。

私の民俗学運動史研究

菊池 暁 (京都大学人文科学研究所)

「運動史」という御題だが、私のささやかな研究史を振り返ると、「民俗学運動史」以外に報告できることはなさそうだ。民俗学は、民俗という資料を保持する主体(≒常民)を研究分担者に変える営みであり、必然的に運動的な側面をもつ。その運動に関与していくプロセスを、研究者から、伝承者から、写真家から、文化財関係者から、教育関係者から、等々、さまざまな場におけるさまざまな主体のさまざまな実践について、行き当たりばったりに研究してきたのが、これまでの私の研究だったといえそうである。今回はその概要を紹介させていただきたい。

北海道における炭鉱の文化運動—太平洋炭鉱の主婦会と『母のうぶごえ』を中心に

姜 文姫 (同志社大学・博士課程)

本報告では、北海道の釧路市にある太平洋炭鉱の主婦会が発行した『母のうぶごえ』を手掛かりにして、主婦会がサークル誌上という空間を通じて果たそうとした文化運動の実態を議論することが重要だと考える。このサークル誌には、詩、短歌、俳句に加え、生活綴方に該当する文章が多数おさめられている。1950年代から60年代にかけての主婦会の大きなテーマであった生活改善とともに、サークル誌において生活綴方の投稿という文化活動を論じ、炭鉱町で暮らす女性たちの作り上げようとした「文化」「運動」の意味を考察する。

古代・中世班のサブ研究会として和歌山大学の
大橋直義氏と共に、共同研究「応永・永享期文化
論 -「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観
のはざままで-」を立ち上げた。平成30年度から32
年度まで行う予定である。

畳・障子・床の間などから構成される和室、醤油
や砂糖によって調味される和食、そして茶の湯や
生け花—これら日本人の生活文化の源流と一般に
考えられてきたのが、室町幕府8代将軍足利義政
の時代に花開いた東山文化である。東山文化とい
う呼称は戦前から存在し、そこでは中国文化の影
響を脱した純日本風の文化という要素が強調され
た。こうしたナショナリスティックな見方は戦後も
概ね継承され、人口に膾炙していった。

しかし近年、中世史や中世文学の研究において
は、東山文化を日本文化の転換点とみなす通俗的
な日本文化論への見直しが進み、東山時代より前
の応永・永享期(4代将軍足利義持～6代将軍足
利義教の時代)に注目が集まっている。従来、北山
文化(3代将軍足利義満の時代)と東山文化の間
に挟まれて研究が手薄だったこの時代こそが室町
文化の確立期であり、文化史上の画期であるとい
う認識が広がりつつある。また、中国文化の室町文
化への影響が再評価されている。

本共同研究は、中世文学・中世史・美術史・芸能
史・宗教学などの分野で活躍する新進気鋭の研究
者を結集し、学際的な研究手法によって応永・永
享期の多様な文化的事象を統合して「応永・永享
期文化論」、ひいては「室町文化史」を構築するこ
とを目指すものである。これにより、東山文化に至
上の価値を置く通俗的な日本文化論を相対化するこ
とも視野に入れている。



写真1 和歌山県立博物館調査風景

初年度の活動実績は以下の通りである。

第1回共同研究会(9月9日、日文研)

山田 徹「室町時代における大名家の追善仏事と
禅宗寺院」

高橋 悠介「応永・永享期の太子伝承」

天野 文雄「室町幕府の松囃子をめぐる二、三の問
題—その形成と実態—」

第2回共同研究会(12月15・16日、同志社大 学今出川キャンパス)

呉座 勇一「応永・永享期における今川氏の歴史
認識」

貫井 裕恵「室町期における東寺と『東宝記』—
東寺執行家を中心に—」

川口 成人「室町期における大名一門・大名被官
の文化的活動」

小助川 元太「『塙囊抄』の神護寺縁起」

小山 順子「勅撰和歌集終焉期の女性歌人につ
いて」

竹島 一希「梵灯庵から宗砌へ」

第3回共同研究会(2月9日、日文研)

谷口 雄太「幻の「六分の一殿」—山名氏にまつわ
る言説の検証—」

坂本 亮太「南北朝・室町期における臨済宗法灯
派の地域展開—紀州地域を中心に—」 亀田 俊和「
台湾人学生の日本史に対する興味関心と問題意
識」

2月10日(和歌山県立博物館)

能仁寺文書・法燈国師法語などを調査。

(写真1)



写真2 御田舞

2月11日(和歌山県有田川町久野原)

吉村旭輝(和歌山大学紀州経済史文化史研究所)氏の案内で久野原の御田を見学。

(写真2・3)

第4回共同研究会[シンポジウム 室町文化と外縁 —文芸に〈国際性〉を読む—]

(3月3日、慶應義塾大学三田キャンパス)

廣木 一人「日明勘合貿易と連歌師宗祇一金子金治郎説の検証を通じて」(基調講演)

小川 剛生「頓阿句題百首の源泉—宋末元初刊の詩集・詩話との関係を中心に—」

伊藤 慎吾「東坊城秀長の文事とその後の菅原家」

芳澤 元「都鄙関係・境界地域にみる室町文化」

橋本 雄「雪舟・良心・松雪軒全果と応仁度遣明船」(コメント)

以上に見えるように、日文研外部での文書調査・フィールドワーク、所外公開シンポジウムなども積極的に行った。和歌山県有田川町久野原地区で毎年岩倉神社に奉納されている民俗芸能「久野原の御田」(県無形民俗文化財)は今年で最後(休止)だったので、貴重な経験を得た。久野原の御田は室町時代から続いてきたとされており、500年の歴史に幕を閉じることになる。

御田は小正月にその年の豊作を神仏に祈願する宗教行事で、東北地方では「田植踊り」、関東・東海では「田遊び」と呼ばれている。東京では板橋区の徳丸北野神社田遊び、同区の赤塚諏訪神社田遊びが有名である。稲作の生産過程を歌謡と舞踊によって模擬的に演じるのだが、現在では春の田起こしから田植えまでで終わる地域が多い。

これに対し、久野原の御田は収穫、さらには収穫物を神様にお供えする糰子供えまで行う点に特色がある。途中、農作業と直接関係ない舅と婿の滑稽な掛け合いが行われるなど、狂言的な要素が含まれているところも興味深かった。

農村の過疎化・少子高齢化や農業従事者の減少によって、田遊び・御田は全国的に中断・廃絶に向かっている。ただ、和歌山県海草郡紀美野町真国宮の丹生神社の御田など、近年復興された事例もある。地元の人々の考え次第であるが、久野原の御田についても、将来の「再開」に期待したい。



写真3 御田舞

研究紹介 ② : 古代・中世班

「イメージとメディアにおける歴史とドラマの表現をめぐる 北米先端メディア理論研究」

アルバロ・エルナンデス
日文研 プロジェクト研究員

若手研究者海外派遣プログラム報告
コンコルディア大学・モントリオール
(2019年01月14日-02月14日)

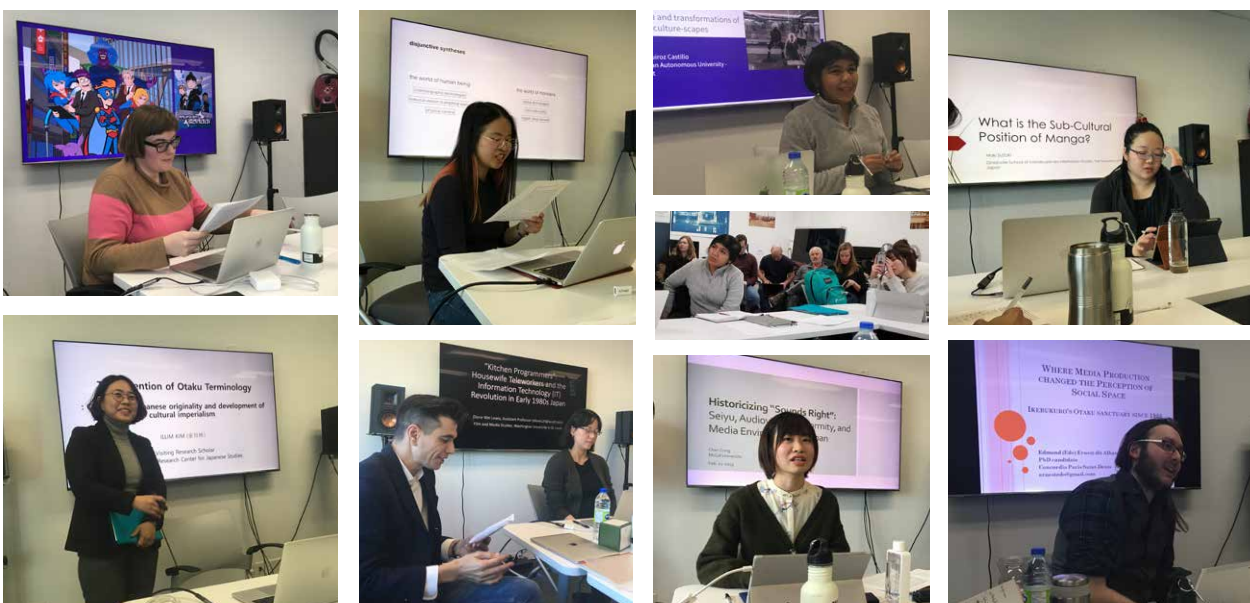
この度、英語圏における日本メディア文化の研究において一つのトレンドを形成し、研究をリードしてきたマーク・スタインバーグ准教授とトーマス・ラマール准教授、その他の研究者と直接議論することを目的とした、「イメージとメディアにおける歴史とドラマの表現をめぐる北米先端メディア理論研究」という研究課題のためにモントリオールに派遣された。具体的には、「イメージとメディア」は基幹研究プロジェクトの対象である漫画やアニメーションを指し、「歴史とドラマ」はそうしたメディアにおける物語性・ドラマ性(フィクション)、そしてメディア史と研究上の方法論のことを指す。

訪問先のコンコルディア大学とマギル大学において、上記の研究課題を以下の側面からアプローチした。1) イメージとメディアの哲学。2) 日本メディア産業論。3) 日本文化・社会論。研究期間中、コンコルディア大学とマギル大学の研究者からガイダンスを受け、議論やインタビューを行ったり、学生と交流、授業などを聴講することによって、上述の三つの側面を踏まえた調査研究を行うことができた。

その研究活動の内容は①ワークショップの企画と開催、②面談やインタビュー、と③講義の聴講や研究グループの見学であった。

①ワークショップについて

2月1日～2日に、コンコルディア大学と日文研の共催による「Media Production as Media Theory Workshop」を開催した。10名の報告者には、コンコルディア大学のマーク・スタインバーグ准教授とマギル大学のトーマス・ラマール准教授とその他の研究者の他に、セントルイス・ワシントン大学(米国)のダイアナ・ウエイ・レウイス助教、日文研の金日林外国人研究員、東京大学大学院の鈴木麻記氏、そしてメキシコのメトロポリタン大学大学院のラウラ・キロス氏が出席し、それぞれの研究を報告した。本ワークショップでは、ラマールとスタインバーグ両准教授とその周囲の研究者と直接議論し、彼らが欧米で展開しているメディア理論とその理論が対象としている日本大衆文化との整合性を検証することができた。



ワークショップの雰囲気

プログラム

Jacqueline Ristola (Concordia University)
“Big Anime eyes!”: Three moments in the transnational circulation of the aesthetics of anime

Il Im Kim (International Research Center for Japanese Studies)
The invention of Otaku terminology

Edmond Ernest Dit Alban (Concordia University)
Where Media changed the Perception of Social Space: The Urban Planning of Otaku territories since 1990

Laura Ivonne Quiroz Castillo (The Metropolitan Autonomous University)
(Re)configuring common places through cosplay: Codigophagia and transformations of Mexican pop-cultural scapes.

Diane Wei Lewis (Assistant Professor, Washington University in St. Louis)
“Kitchen Programmers”: Housewife Teleworkers and the Information Technology (IT) Revolution in Early 1980s Japan

Chen Cong (McGill University)
Historicizing “Sounds Right”: Seiyu, Audiovisual Conformity, and Media Environment in Japan

Álvaro David Hernández Hernández (International Research Center for Japanese Studies)
The Vocaloid scene in Japan as an interinstitutional system: an open network of closed worlds

Aurélie Petit (Concordia University)
Of Tentacles and Men: An approach to the French reception of Japanese pornographic animation, between 1978 and 2008

Maki Suzuki (Tokyo University)
How can we evaluate the “peripheral” nature of manga?

Hang Wu (McGill University)
How to Eat a Monster: The Production of Animated Special Effects in *Monster Hunt* (2015)

②面談やインタビューについて

面談やインタビューを合計7名に行なった。その中でも以下のものは特に重要であった。

トーマス・ラマール准教授と5回面談を行い、その内4回はインタビュー（それぞれ2時間程度）を行なった。インタビューは*The Anime Ecology: A Genealogy of Television, Animation, and Game Media* (Minesota Press 2018)の内容と課題を中心に行なった。

マーク・スタインバーグ准教授と4回面談を行い、その内3回はインタビュー（それぞれ1時間程度）を行なった。インタビューは*The Platform Economy: How Japan Transformed the Consumer Internet* (Minesota Press 2019 Spring)の内容と課題を中心に行なった。

コンコルディア大学のGlobal Emergent Media LabのディレクターJoshua Neves氏とClemens Apprich氏（派遣ポスドク）と1回面談。テーマは「メディアとパラノイア」や「ポストメディア」といった現在上記の2名が進めている最新メディア論を中心に行なった。

コンコルディア大学歴史学科Matthew Penney准教授から一回ガイダンスを受けた。テーマは「歴史と物語」の研究の基本文献やアプローチ方法であった。



左 トーマス・ラマール
The Anime Ecology: A Genealogy of Television, Animation, and Game Media (Minesota Press 2018)



右 マーク・スタインバーグ
The Platform Economy: How Japan Transformed the Consumer Internet (Minesota Press 2019 Spring)



写真 マギル大学の付近

③講義の聴講や研究グループの見学などについて

講義の聴講や研究グループの見学を合計5回行なった。その中で以下のものは特に重要であった。

マギル大学、トーマス・ラマール准教授のゼミを聴講(3回)。テーマは「Inventing the Modern Japanese Novel」(妖怪とメディア論)。

コンコルディア大学、Global Emergent Media Labの読書グループに参加。テーマはYves Cittonの「The Ecology of Attention」。

コンコルディア大学、Phillip Domicik博士後期課程の博士論文試験を聴講。テーマは消費と歴史、「参加型歴史」やファン文化など。

基幹研究プロジェクトにおいてこの派遣が果たした役割

この派遣の成果はH29年度の基幹研究プロジェクトの外部評価で強調された北米(英語圏)との交流の必要性といった指摘に答えるものであり、同基幹研究プロジェクトに貢献することができた。基幹研究プロジェクト「日本大衆文化研究」の一つの研究対象は、日本文化の表現の歴史における漫画と視覚文化の研究である。コンコルディア大学とマギル大学で出会った研究者や学生は、英語圏におけるそうしたフィールドの一つのトレンドを代表している。この度、ワークショップなどによって、彼らが発展させている研究の方法論を確かめ、本基

幹研究プロジェクトの「通時的・国際的研究」といった展望との整合性を確認することができた。2月23-24日に日文研で、行なった共同研究会でその成果を共同研究会のメンバーと共有した。日文研の招聘でカナダを訪問した日本・韓国・米国・メキシコからの報告者は、本研究基幹プロジェクトとの協力における実績をすでに持っており、コンコルディア大学やマギル大学との交流の場を作ったことによって、今後の新たな研究交流への道を開くための準備に貢献することができた。

所属機関における学術分野に貢献する事項

学術分野の面においては、以下の貢献が指摘できる。海外の日本現代大衆文化への注目を重視するいわゆる「クール・ジャパン」をめぐる議論においては、国内の日本研究と海外(特に英語圏)の日本研究との間のミスマッチの問題がある。日文研の本研究プロジェクトは、漫画やアニメーション研究において日本国内の日本研究の方法論を用いながら、海外の研究トレンドで採用される「メディア・ミックス」や「プラットフォーム」などの用語も採用する。この活動には、マーケティング中心主義である「クール・ジャパン」のような日本研究への批判を唱えながら、海外の漫画や日本大衆文化研究者との交流を促進する目的もある。この派遣で行なった研究はその課題を通して、国内外の方法論を検討したため、日文研における漫画や日本大衆文化の「国際的な」研究に貢献するだろう。

大衆文化研究プロジェクトでは、秋から冬にかけて、次の事業を実施予定です。

・「パリ・アカデミックプログラム」「時代劇映画『旗本退屈男』きもの展示」(仮)

10月下旬に、パリのディドロ大学とINALCO(フランス国立東洋言語文化研究所)において、「パリ・アカデミックプログラム」と題し、日本の大衆文化研究についてのシリーズ講義およびワークショップを開催予定です。またこれに関連して、パリ日本文化会館(予定)において、東映・東映太秦映画村・国立歴史民俗博物館との共催による「時代劇映画『旗本退屈男』きもの展示」(仮)と題する企画が進行中です(大正期に活躍した日本画家でのちに映画美術の世界で活躍した甲斐庄楠音が手掛けた映画『旗本退屈男』の貴重な舞台衣装を展示予定)。なお、同展示会期中(10月24日を予定)には、フランス語字幕入りの『旗本退屈男』の上映も行う予定です。

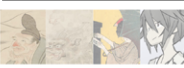
・「明治期の文芸雑誌と図案教育にみるアール・ヌーヴォー受容と大衆文化(仮)」展

京都工芸繊維大学美術工芸資料館との連携により、両機関の所蔵品を中心に、明治期における京都高等工芸学校(1902年創立)の図案教育と文芸雑誌の挿絵についての資料を展示することで、日本の大衆文化におけるアール・ヌーヴォー受容の一端を紹介します。

・メキシコマンガ「イストリエタ」展示

京都国際マンガミュージアムで2019年12月7日から、メキシコマンガ(イストリエタ)を中心にする展示と講義会を企画中です。日本大衆文化の一面である日本マンガ文化と他国のマンガ文化との交流を目指す展示企画です。

機関拠点型基幹研究プロジェクト
大衆文化の通時的・国際的研究による
新しい日本像の創出



大衆文化研究プロジェクトニュースレター

No.03 2019

タイトルデザインの図版の原典は左からの順で以下の通りです。

- 1)「福富長者物語」
神谷詮敬(1775年写)日文研所蔵
- 2)「百鬼ノ図」
伝土佐光吉(1539-1613)日文研所蔵
- 4)「絵葉書世界」第14号より、日文研所蔵
- 5) 山路亮輔(2015年)「縦スクロールまんが」より

大衆文化研究プロジェクトニュースレター (No. 3: 2019年07月31日発行)

発行: 国際日本文化研究センター
プロジェクト推進室

前川 志織 特任助教
木場 貴俊 プロジェクト研究員
アルバロ・エルナンデス プロジェクト研究員

〒610-1192京都市西京区御陵大枝山町3-2
tel: 075-335-2079
fax: 075-335-2090
e-mail: taishu_staff@nichibun.ac.jp
<http://taishu-bunka2.rspace.nichibun.ac.jp/>